

大学ボランティアセンターにおけるコーディネーションの役割

中村 みどり

大学ボランティアセンター(以下センター)におけるコーディネーターの役割は、「①学生を活動の場につなぐコーディネーション」と、「②活動の場におけるコーディネーション」である。それらを通じて学生の学びと自立を促していくという大学教育を担う点において、専門的な機能が求められている。本稿では、これらについて主に池袋キャンパスでの取り組みの意図について述べ、今後のセンター及びコーディネーションのあり方について考えてみたい(事業の詳細については活動報告の本文を参照されたい)。

① 学生を活動の場につなぐコーディネーション

ボランティア活動の中間支援組織の「場」として、まず学生が社会(個人や団体)と出会う拠点となる本学のセンターは、2013年4月の5号館へのセンター移転に伴って、その機能を十分にいかすためのハードとソフトの面での工夫がなされた。学生にとって親しみやすく、また多様な要望に対応しやすい空間と設備にともなって、ボランティアに関する情報をより広く提供していくことが可能になった。ボランティアに関わるセミナーや授業の後に、センターに立ち寄って情報を探す学生も多く、コーディネーターが活動に対する不安や疑問に答え、活動を開始する際の基本的な留意点を合わせて伝える機会が移転以前と比較して増加している。

センターをはじめ利用する学生のみならず、これまでのボランティア経験をベースに、目的を明確にした活動を希望する学生、また独自の社会貢献活動を広げるための相談や、センターと学生団体との協働など、それぞれのニーズにあった支援と情報の提供を行っている。

大学主催のプログラム(立教キャンプ、震災復興支援)では、活動前後の取り組みを含めて学生がテーマについて深め合い、より広く社会的課題に関わる活動や専門科目の関心へと発展させている。

② 活動の場におけるコーディネーション

学生ひとりひとりの関心に響く様々な要素をプログラムに取り入れることによって、気づきや学びを多面的に促すことを重視している。漠然と新しい体験を求めて活動に参加する学生が多い傾向にあることから、体験のふりかえりを通じて、活動のテーマにフォーカスを当てた主体的な参加に導くことを実践している。そのことから、「仲間との話し合いが有意義であった」という感想を持つ学生が多く、リフレクションの要素は自発的な学びと行動を促すものとして欠かせないものとなっている。

活動全体を通じて、学生が異なる世代や環境に生きる多様な他者との「共生」を考えること、また自分の固定観念を客観的に見つめ直し、実体験に基づいて自立した考えを構築することは、高等教育機関に設置されたセンターが向かうべき教育目的ではないだろうか。またコーディネーター以外にも、大学教職員が学生と活動と一緒にいき、地域社会と関わり合うことによって、センターの理念と実践の裾野を大学全体に広げていくことが可能になると考えることができる。

これまでの立教大学の社会貢献活動の伝統を受け継ぎ、大学教育全体において、センター運営とコーディネーターの専門性の確立に向けて歩み続けることが、本学のセンターとして果たしていく重要な役割であると考えられる。

(ボランティアコーディネーター 池袋)